

早苗田古墳群

現状調査報告書

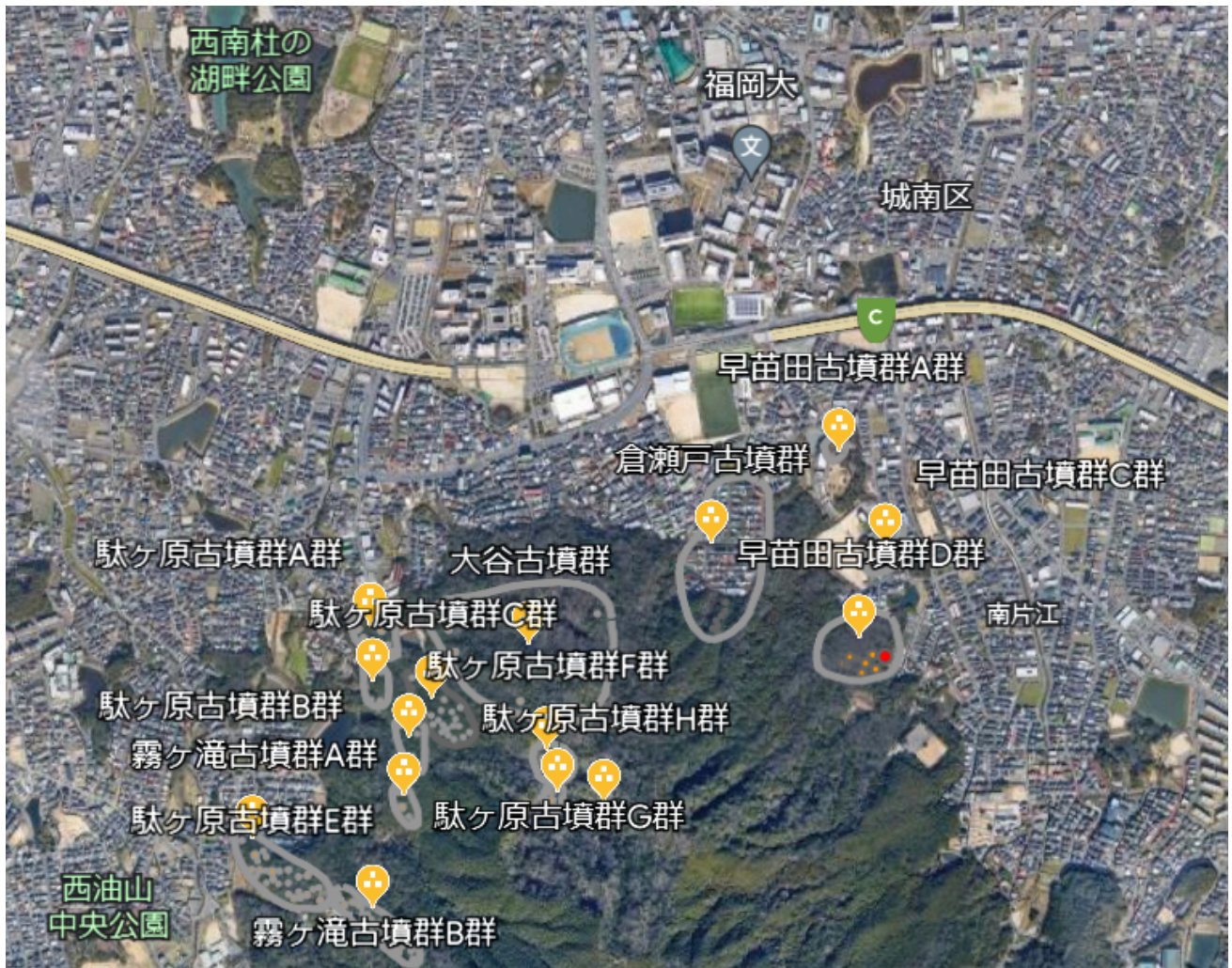


2023年
油山古墳研究室

目次

早苗田古墳群 立地と環境	1P～2P
早苗田古墳群A支群	2P～3P
早苗田古墳群B支群	3P～4P
早苗田古墳群C支群	 4P

早苗田古墳群D支群		5P~13P
早苗田古墳群古墳データ		14P
早苗田古墳群石室開口方向		14P
早苗田古墳群D支群地形図と石室		15P



早苗田古墳群 —立地と環境—

背振山塊の派生支脈である油山（標高 592m）は福岡市の西郊にそびえ、博多湾に向かって多くの丘陵を派生している。特に小笹、平尾周辺の台地は、標高100mの鴻ノ巣山を最高位として発達しており、福岡平野と早良平野を二分する。樋井川流域一帯は油山を源とする西の片江川と東の一本松川による開析によって狭長な沖積地が開け、片江川流域の低台地には古墳時代の集落片江辻遺跡などが存在する。また、室見川の開析によって開けた早良平野の周辺には羽根戸古墳群、金武古墳群、重留古墳群など多くの古墳群が存在している。早苗田古墳群は福岡市城南区大字片江に所在し、油山麓部一帯に群集する一大群集墳のひとつである。西側に倉瀬戸古墳群、東側に鳥越古墳群が分布している。本古墳群は標高30～80 m前後の丘陵上に位置し、A、B、C、D の 4 支群で構成される。

A支群は油山より北東にのびる低丘陵上の先端部、標高約33mに存在し、黙想の家の敷地内に位置する1基をさす。

B支群はA支群の南方向の西側丘陵斜面に位置する2基をさし、東側にC支群、西側には倉瀬戸古墳群がある。1、2号墳とともに横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。

C支群はB支群の東側丘陵頂部に位置し、「片江古墳群」（註1）の報告書の中でいう片江2、3、4号墳の3基をさすが宅地造成のために現存しない。

D支群は油山から北東に延びる丘陵のゆるやかな南側斜面に立地する13基をさす。横穴式石室を埋



葬主体に持つと思われる円墳からなり、西側に B 支群、C 支群、東側に鳥越古墳群が存在する。また、本群は1～4号墳、5号墳、6～10号墳、11～13号墳とその分布、立地状態によって分けることができる。1～4号墳は標高45～55mの

間に位置し、谷に向かって南東方向に開口する。各々の古墳は互いの墳裾を接する状態にある。5号墳はD支群中最北端にあり、7号墳とは70m近く離れている。しかも標高45mの尾根上に占地し、開口方向を西にとるため、D支群中に於いて特異の在り方を示す。6～10号墳は標高35～40mの間に分布し、谷に向かいほぼ南に開口する。また、先の1～4号墳と同様に近接している。10号墳は宅地造成のため現存しない。(註2) 11～13号墳は1～4号墳から西に約50m離れ、標高65～85mの尾根東側に位置し、D支群中でも最高所に存在する。1～4号墳と

—早苗田古墳群全体地形図—

同一方向に開口するが、占地の在り方に若干の相違がみられる。

註1「片江古墳群」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集』福岡市教育委員会 1973 年

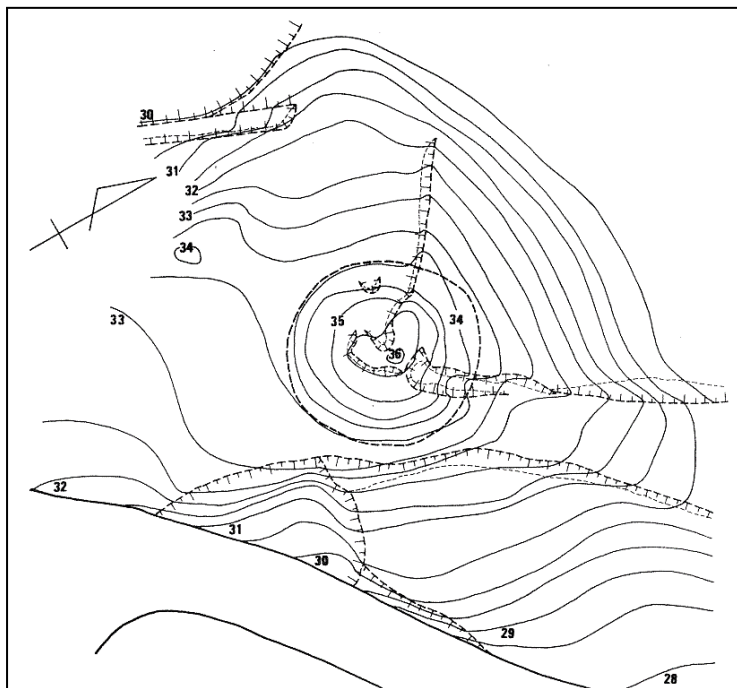
註2「早苗田D群10号墳」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第67集』福岡市教育委員会 1981年

(早苗田古墳群A支群1号墳)

本墳は油山より北西に延びる低丘陵上の先端部、標高 33.5～36.0mに位置する。本墳の北側斜面は急傾斜で水田へと落ちており、また、南側は本墳の南側に位置する「黙想の家」の道路建設に伴う整地作業によって自然地形を有しておらず低く落ち込んでいる。

<墳丘>

墳丘北側は斜面が急なため、多量の盛土が流出したものと考えられ、また、墳丘西側は後年の削平のため墳丘の残存状態は極度に悪い。



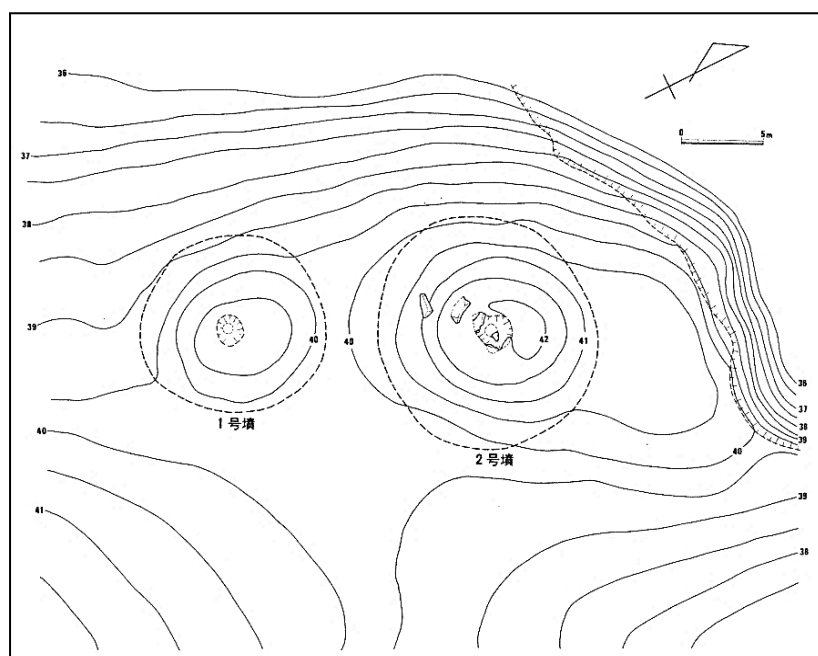
墳丘頂部付近においても、北側および北西側は盛土の流出が激しく、東側および南側はやや盛り上がりが見られる。また、墳丘の北西側墳裾付近は削平を受け、構状の落ち込みとなっている。尚、墳丘径および墳丘平面形等の詳細は不明である。

<石室>

石室は埋没しており、埋葬施設は明らかでない。西側に50×35cm程度の石が1個表出し東側にも同じ程度の石が2段積まれているのみである。

—早苗田古墳群A支群地形図—

* 早苗田古墳群A支群1号墳の文面および作図は1985年福岡大学歴史研究部考古学班発行「早苗田・鳥越古墳群現状調査報告書」より転用した。従って、古墳の分布状況、保存状況、図面は当時のものである。



(早苗田古墳群 B支群1号墳)

本墳は北東に延びる低丘陵の頂部よりやや西側の斜面上、標高39.0～40.0mの間に位置し、墳頂高は41.0mを測る。本墳の北側約17mに2号墳が存在し、標高差は約1.5mを測る。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、多少の流出は見られるが、残存状態は良好である。墳丘平面形は、現状では不整な円形を呈し、墳丘径は主体部主軸方向で約10m、主体部直交方向で約12mを測る。墳頂部と墳裾部の比高は東

—早苗田古墳群B支群地形図—

側で約1m、西側で約2mを測る。墳丘の羨道部付近は、石抜きあるいは自然崩壊により陥没している。

＜石室＞

本墳の埋葬施設は、開口主軸方向をS-80°-Wにとり、ほぼ西側の谷に向って開口する横穴式石室である。石室の残存状態が悪く、現状では奥壁と奥壁側の左右側壁、そして、それらに架構する天井石、それに羨道部の一部を残すのみである。玄室の規模は現状において奥壁幅約1.0m、左右側壁幅約0.9mを測り、現床面より奥壁に4段、右側壁に3段、左側壁に4段の石積みが確認できる。

奥壁は1段目が石材の上部がわずかに表出するのみであり、2段目に45×40cm程度の方形の石材を2枚、3段目には40×20cm程度の横長の石材を1枚、4段目には20×30cm程度の石材を2枚用い、その上に天井石を架構している。

右側壁は1段目に2枚の石材を用い、その上に55×45cm程度の石を積み、3段目には20×30cm程度の石材を2枚用いている。左側壁の1段目は石材の上部がわずかに表出するのみで、2段目は40×20cm程度の方形の石材を2枚、3、4段目には40×15cm程度の横長の石材を各2枚用いており、奥壁へ架構する力石の使用が見られる。天井石は奥壁側の1枚が残っているのみである。また、左側壁上部には持ち送りが見られる。

羨道付近は石抜きあるいは、自然崩壊により詳細は不明であるが、南側に1個の石材が認められる。本墳の石材はすべて花崗岩である。

（早苗田古墳群B支群2号墳）

本墳は1号墳の存在する低丘陵上の先端部ほぼ頂部、1号墳の北約17m、標高約40～42mに位置する。本墳の北側から西側にかけて斜面は急傾斜となり谷が通っている。本墳が位置している低丘陵部より早苗田古墳群C支群（1972年発掘）の位置していた丘陵を望むことができる。

＜墳丘＞

本墳の墳丘盛土は、天井石及び周壁上半部の崩壊により、墳頂部付近では失われており、楣石の高さまでしか残っていないが、全体的にみると、残存状態は良好である。墳丘径は現状で、主体部主軸方向で約13.5m、主体部直交方向で約13mを測り、墳丘平面形はほぼ円形を呈している。墳丘の最高所は標高約42.5mを測り、墳裾部との比高は東側で約2.5m、北側で約1.5mである。

＜石室＞

埋葬施設は開口主軸方向をS-55°-Wにとり、ほぼ西に開口する両袖の横穴式石室である。現状では、石抜き及び自然崩壊により土砂が流入し、残存状態は悪く、両袖石と楣石、また、奥壁、右側壁各々1枚の石材が確認できるのみである。

玄室の奥壁は右側壁側に約90×50cmの石材が残っている。それとほぼ直角に約60×70cmの右側壁の石材が接している。

左側壁は現状では石材を確認できない。前壁は左右袖石が30cm程表出しており、その上に約120×30cmの石材を架構し、楣石としている。

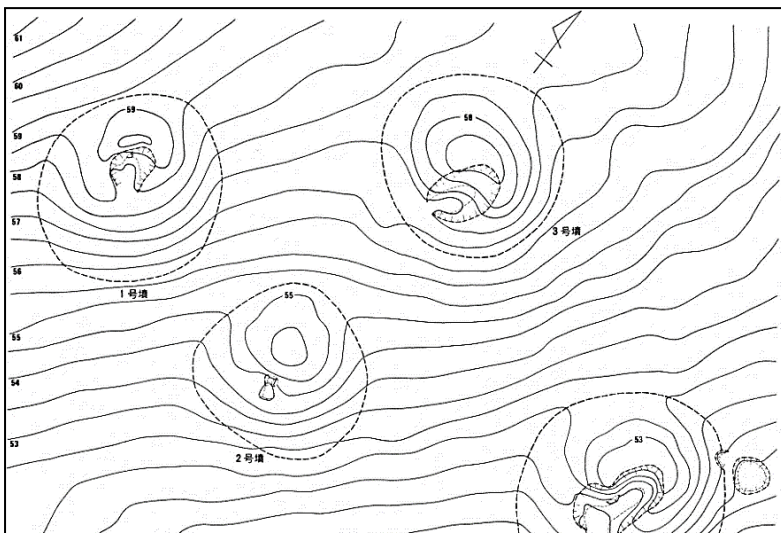
羨道は土砂の流入により明確ではないが、墳丘上に羨道部天井石と思われる約140×70cmの石材が確認できる。石材はすべて花崗岩である。

* 早苗田古墳群B支群の文面および作図は1985年福岡大学歴史研究部考古学班発行「早苗田・鳥越古墳群現状調査報告書」より転用した。従って、古墳の分布状況、保存状況、図面は当時のものである。

（早苗田古墳群C支群（1～3号墳））

本古墳群はすでに発掘調査を終え消滅している。1973年福岡市教育委員会発刊の「片江古墳群発掘調査報告書」の2～4号墳がこれに該当する。

（早苗田古墳群D支群1号墳）



本墳は油山から北東に延びるなだらかな丘陵の南東斜面にあり、2号墳の西北西約18m、3号墳の南西約24m、標高55.5～59.0mの間に位置する。

＜墳丘＞

本墳の墳丘盛土は、天井石及び壁体上半部の欠落による石室内への土砂流入のため、著しく変形し、墳丘中央部は円形状の落ち込みをなしており、墳丘南東部は斜面に伴う土砂流出がみられる。しかし、墳丘

北西部は本墳の他の部分と比較して残存状態は良好である。現状では墳丘径東西で約11.5m、南北で約11.5mを測る円形を呈する。

－早苗田古墳群D支群1～4号墳地形図－

墳丘の最高所では標高56.8mを測り、墳裾部との比高は北西側で0.8m、南東側で3.3mである。

<石室>

本墳の埋葬施設は、天井石と壁体上半部の欠落により土砂流入が著しく、大半が埋没していると思われ、詳細は不明であるが、落ち込みの状態より等高線に直交して南東方向即ち谷側に向って開口する横穴式石室であると思われる。その落ち込みの大きさは長軸で2.5m、短軸1.6m、深さ0.8mを測る。落ち込みには縦に積まれた石材が2個とほぼ中央部に石室に使用されたと思われる石材が露出している。本墳の石材はすべて花崗岩である。

（早苗田古墳群D支群2号墳）

本墳は北東に延びる丘陵の南東側斜面にあり、標高52.5～55.0mの間に位置する。西北西約18mに1号墳が、北北東約19mに3号墳が、それぞれ存在している。残存状態は墳丘、石室ともに良好である。

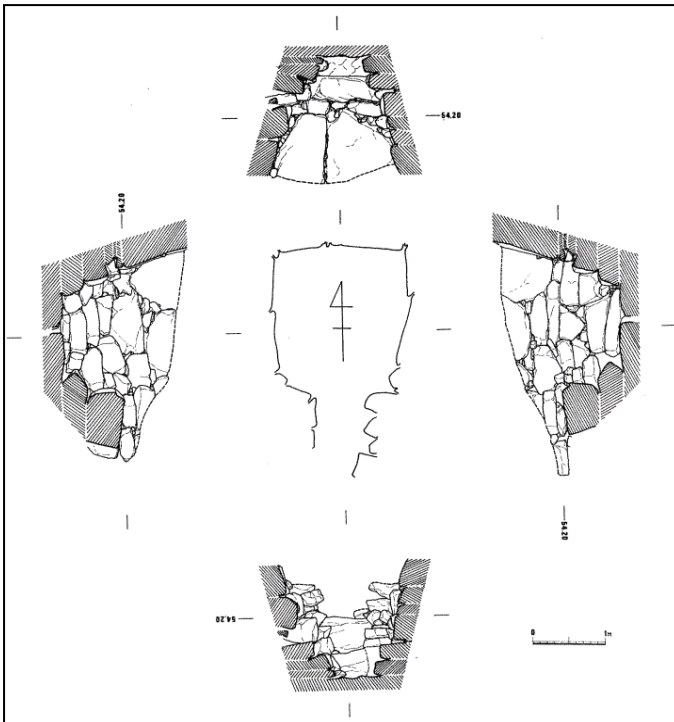
<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、若干の流出は見られるが良好である。墳丘径は主体部主軸方向で約10m、主体部直交方向で約11mを測り、平面形は不整な円形を呈している。墳頂部は盛土の流出により、やや平坦になっており、墳丘の羨道部付近は盛土の削平および流出により、羨道部の天井石と楣石の一部が露出している。

<石室>

本墳の埋葬施設は、開口主軸方向をS-4°-Eにとり、谷に向かってほぼ南に開口する、両袖単室の横穴式石室である。

玄室規模は現状において、奥壁幅1.8m、前壁幅1.5m、右側壁長2.0m、左側壁長1.86mである。壁体の構築法は、奥壁では2枚の腰石を縦位に置き、その上に3段積み上げ、天井石を架構している。



側壁は両壁とも共通しており、奥壁側に各1枚の腰石を縦位に、次に各2枚の腰石を横位に置き、その上に4段～5段積み上げ、天井石を架構している。奥壁と両側壁の隅角は右側壁で3段目に、左側壁で4段目に力石が用いられている。

前壁は楣石の上に石材を1枚積み、天井石を架構している。玄門部は両袖石とも土砂の流入のため、その構成は不明な点があるが、現状で右側に3段、左側に2段確認することができる。その上に楣石を載せている。

羨道部は大半が埋没しており、その詳細は不明である。本墳に使用されている石材はすべて花崗岩である。

－早苗田古墳群D支群2号墳石室実測図－

（早苗田古墳群D支群3号墳）

本墳は油山から北東に延びるなだらかな丘陵の南東斜面に存在し、標高約56.0～57.5mの間に位置する。また、本墳の南東約24mに1号墳が、南南西約19mに2号墳が、南東約21mに4号墳がそれぞれ存在する。

それぞれ存在する。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、墳丘の南東側を中心に斜面に伴う土砂流出が激しく、著しく変形しているものの、北西側にはかなりの盛り上がりが残っている。現状で、墳丘規模は南北径約11.5m、東西径約12.0mを測り、墳丘平面形はほぼ円形を呈している。

<石室>

本墳の埋葬施設は、石抜き及び自然崩壊、また、土砂の流出のために、長軸4.5m、短軸約3.5mを測る楕円形状の落ち込みとなっているため、詳細は不明であるが、落ち込みの状態より、等高線に直交して南東、即ち、谷に向かって開口する横穴式石室であると思われる。落ち込みの左側壁側に縦に積まれ

た石材が2個、半ば埋没した状態で確認できるのみである。本墳に使用されている石材はすべて花崗岩である。

（早苗田古墳群D支群4号墳）

本墳は油山から北東に延びる丘陵の南東斜面上、標高49.0～52.0mの間に位置し、本墳より西へ約25mに2号墳、北西へ約23.5mに3号墳が存在する。残存状態は、墳丘は比較的良好であるが、石室は落ち込みが残るのみである。

＜墳丘＞

墳丘盛土は左側壁側の一部が削平され流出しているが、残存状態は比較的良好である。規模は現状で、南北径15.5m、東西径13mの不整な円形を呈している。墳頂高は約53.4mを測り、墳裾部との比高は南側で約4.4m、北側で約1.4mである。また羨道部の墳丘は石抜き、自然崩壊のため流出が激しい。西側墳裾付近に小ぶりの石を数個確認することができる。

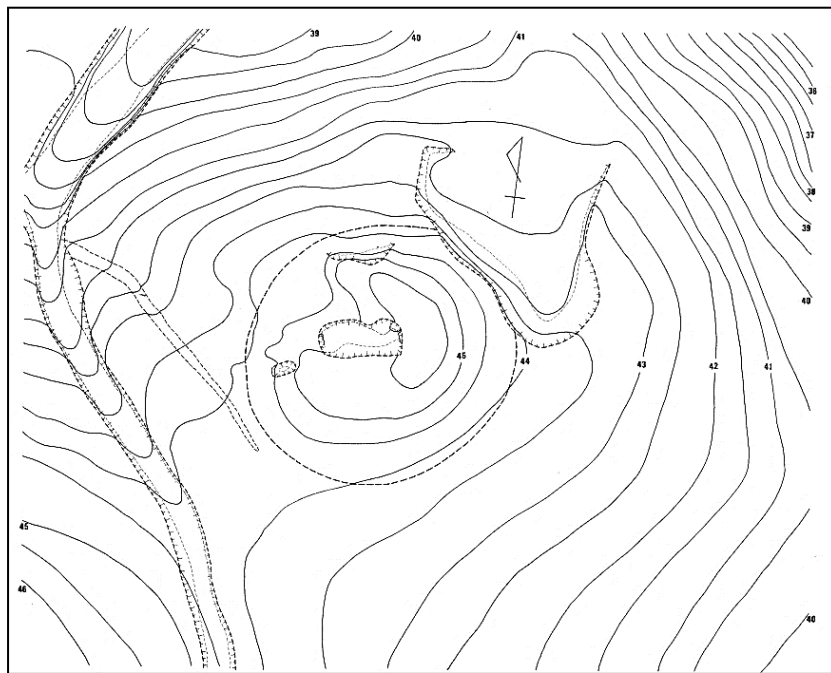
＜石室＞

埋葬施設は石抜き及び自然崩壊のため陥没し、現在落ち込みが残るのみで、残存状態は悪いが、その落ち込みから判断して、南西方向に開口する横穴式石室と思われる。落ち込みの規模は現状で約4×8mである。石材は現在、左側壁側に1個確認できるのみである。石材は花崗岩である。

（早苗田古墳群D支群5号墳）

本墳は油山から北東に派生した丘陵の北側斜面、標高43.5～44.0mで、早苗田D群中、最も北に位置しており、本群の4号墳より北に50m程離れている。他の古墳が東～南東側斜面に位置し、南側の谷に向かって開口しているのに対し、本墳は北西側の谷に向かってほぼ西側に開口しており、本群の他の古墳とは立地、開口方向に関して異なっている。また、本墳の東側、約50mの位置まで、片江地区区画整理事業に伴う宅地造成により削平整備されている。

＜墳丘＞



天井石及び周壁の石抜き、自然崩壊などにより中央部付近は陥没している。墳丘盛土の流出は、特に墳丘西側において激しい。墳丘東側は本墳の他の部分に比べると残りはよい。現状で、墳丘径は東西に16.8m、南北に16.1mを測り、ほぼ円形を呈す。また、北東側墳裾部から南東側にかけて削平された部分があり、北側の墳丘斜面には半円形の落ち込みが見られる。また、墳丘の南西側に1.5×0.8m程度の落ち込みが存在するが、この落ち込みの奥部には花崗岩の存在が認められる。

—早苗田古墳群D支群5号墳地形図—

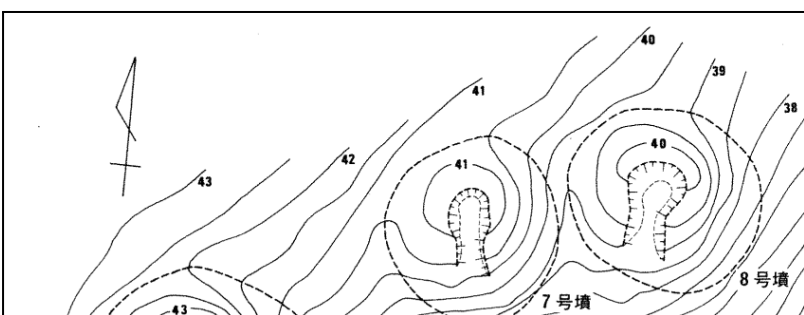
＜石室＞

埋葬施設は現状より西側に開口する横穴式石室である。石室内は石抜きや自然崩壊などにより、大量の土砂が流入しており、床面は著しく陥没している。石室の落ち込みは現

状で、長軸 5.24m、短軸

2.02mを測る。石室内における石積みは、奥壁と左側壁の奥壁側を残すのみである。奥壁は現状において、壁高1.6m、壁幅1.3mを測る。その構築状態は30×50～70cm程度の石材を横位に組み合わせており、現床面より5段の石積みが認められる。左側壁は50cm前後の石材を組み合わせており、現床面より3段の石積みが認められる。特に奥壁の石材は割石を使用し、壁面を整えている。石材の材質はすべて花崗岩である。

（早苗田古墳群D支群6号墳）



本墳は北東に延びる丘陵の東側斜面に位置し、標高は約40.0～43.5mを測

る。本墳より東側約20mに9号墳、北東側約20mに7号墳が存在する。

<墳丘>

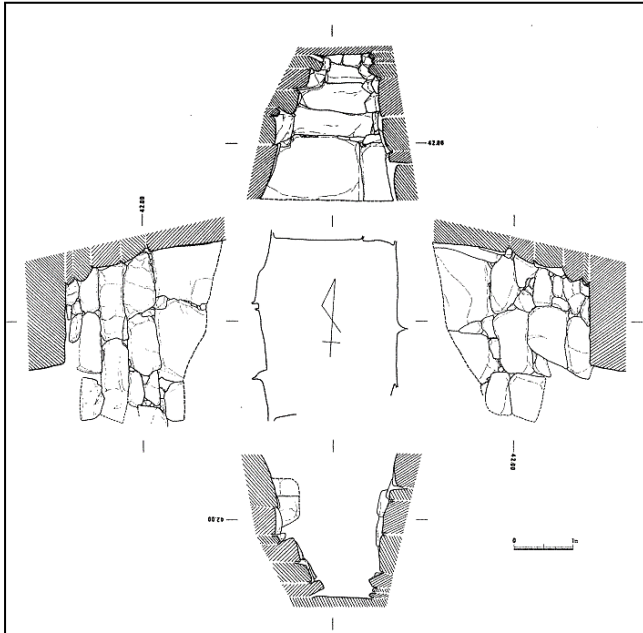
墳丘盛土はほぼ原形を保っているが、前壁から羨道部にかけての盛土は落ち込んで石室内に流入している。また、墳丘中央部付近の盛土が流出して天井石が露出している。墳頂高は45.

3mを測り、墳裾部との比高は南東側

—早苗田古墳群D支群6～9号墳—

で約4m、北西側で約2mである。墳丘径は主体部主軸方向で約12.8m、主体部直交方向で約13.5mを測り、墳丘平面形は不整形円形を呈している。

<石室>



—早苗田古墳群D支群6号墳石室実測図—



—早苗田古墳群D支群6号墳羨道部から奥壁—

2019年11月撮影

埋葬施設は主軸をS-4°-Wにとり、ほぼ南に開口する両袖単室の横穴式石室である。現状では前壁及び羨道部が完全に崩壊している。現床面より天井石までの高さは2.5mを測り、天井石は現状で一枚の石が奥壁から2m程度かぶされている。

奥壁は現状で5段より構築され、腰石は左側壁側に150×110cm程度の石を、右側壁側に60×110cm程度の石を配し、2～4段目に大ぶりの石を横位に配し、1段小ぶりの石を2個積んで構築している。

右側壁は腰石に奥壁とほぼ同大の2個の割石を配しているが、袖石側の腰石は土砂流入の為埋もれている。2段目からは奥壁側は小ぶりの石を多用している。

前室側は大ぶりの割石を使用し4段で構築されている。奥壁側にややせり出しがみられる。

左側壁は腰石に大ぶりの石2個と前壁側に小ぶりの石を1個配している。2段目からも大ぶりの石が積れ、4段で構築されている。奥壁側と4段目に力石の架構がみられる。

周壁は腰石の上1段目で一定レベルを構成している。持ち送りはさほど顕著ではないが、左側壁においては腰石をやや内傾させて配し、同傾斜に持ち送っている。本墳に使用された石材は、すべて花崗岩である。

(早苗田古墳群D支群7号墳)

本墳はD群の下部5基の1基であり、緩やかな丘陵の標高39.5～42.0mの東側斜面上に立地し、6号墳より北東に約20m、8号墳より西南西に約12mの距離にある。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、石室の石抜き及び自然崩壊により中央部付近は失われ、円形状の落ち込みをなしている。しかし、墳裾部はかなりはっきりしており、墳丘径は南北約11m、東西約10mを測り、円形の墳丘を呈する。墳丘最高所では48.3mを測り、墳裾部との比高は北側で約1m、南側で約3m程である。東側、南側墳裾はやや急に流れ落ちており、東側墳裾は8号墳に隣接する。

<石室>

本墳の埋葬施設は、石抜き及び自然崩壊のため落ち込みとなっており詳細は不明であるが、その状態

より南に開口する横穴式石室であると思われる。その落ち込みの規模は長軸約5m、短軸約2.5m、深さ約1.5mを測る。また、左側壁と奥壁が接すると思われる部分には縦位に配された石材を2枚確認することができる。本墳に使用されている石材は全て花崗岩である。

(早苗田古墳群D支群 8号墳)

本墳は6、7号墳の位置する緩やかな丘陵の傾斜が南東方向に急に落ちる変更線付近にあり、標高38.0～41.0mの間に位置する。本墳の南西約12mに6号墳が、南東約21mに10号墳がそれぞれ存在している。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、石抜き等により中央部付近が陥没している以外は流出もなく、残存状態は良好である。現状では墳丘径は東西約11m、南北約10mを測り、円形を呈している。墳丘最高所は約41mを測り、墳裾部との比高は北側で約1m、南側で約2m、西側で約1.5m、東側で約2m程である。

<石室>

本墳の埋葬施設は、石抜きおよび自然崩壊のため陥没しており、詳細は不明である。陥没部分の大きさは長軸約5.5m、短軸約2～3.5m、深さ約2m程であり、その方向などから南に開口する横穴式石室であると思われる。

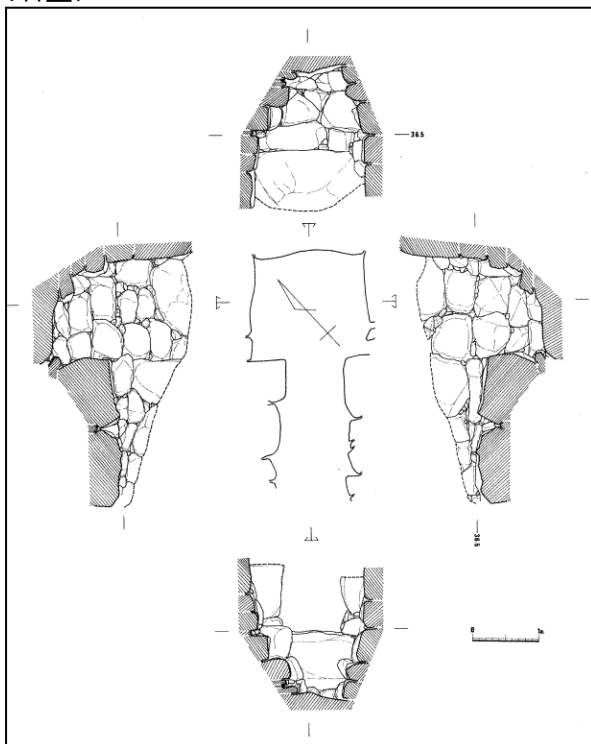
(早苗田古墳群D支群 9号墳)

本墳は北東にのびる丘陵の南東側斜面の標高約36～38.5mにあり、墳頂高約40.5mを測る。本墳より西約20mに6号墳が、東北東約27mに10号墳がそれぞれ存在し、北西側では7・8号墳と近接している。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、南東側および東側で若干の流出が見られるが、残存状態は良好である。現状では、墳丘径は主体部主軸方向で約15m、主体部直交方向で約13mを測り、墳丘平面形は不整の円形を呈している。墳頂部と墳裾部の比高は北西側で約1m、南東側で約4.5mである。

<石室>



本墳の埋葬施設は、主軸をS-40°-Wにとり、南西に開口する両袖単室の横穴式石室である。現状は土砂の流入が激しく、羨道部では、そのほとんどが玄室部でも腰石下部までが埋没しているが、残存状態は良好である。床面には石材が散乱している。玄室は奥壁幅1.65m、前壁幅1.77m、右側壁幅1.52m、左側壁幅1.55mを測る。

奥壁は水平に目路の通った4段構築である。腰石には大ぶりの石を1枚横位に置き、腰石上段の石2枚と共に若干内傾させている。右側壁との隅角には壁幅を合わせるため、腰石途中より小ぶりの石を3枚積みあげている。3段目および4段目は持ち送りが顕著となる。側壁は右側壁5段、左側壁6段である。両壁とも類似した構築法である。大ぶりの石を奥壁側に横位に配置し、壁長を合わせるために小ぶりの石を配し

—早苗田古墳群D支群9号墳石室実測図—
て腰石としている。3段目までは、縦横に目路が通るように大ぶりの石を横位積み、その上段からは下段の2石にまたがる様な横積みを2段施し、その上に天井石を架構している。また奥壁と同様に、3段目より内側への張り出しが顕著となる。奥壁との隅角は、右側壁では腰石の上から左側壁では3段目から互いに重なる力石が使用されている。玄門部は両袖で2段構築であり、玄門幅 0.90m

を測る。楣石には巨石を用いており、天井石との間には天井石を安定させるために小ぶりの石を2枚横位に積んでいる。天井石は1枚である。

羨道は土砂の流入が著しく上段の1～3段を残し、袖石下部まで埋没している。羨道長は現状で、右壁2.14m、左壁 1.92mを測る。天井には長さ1.15mを測る石が1枚残っている。石室に使用されている石材は、すべて花崗岩である。

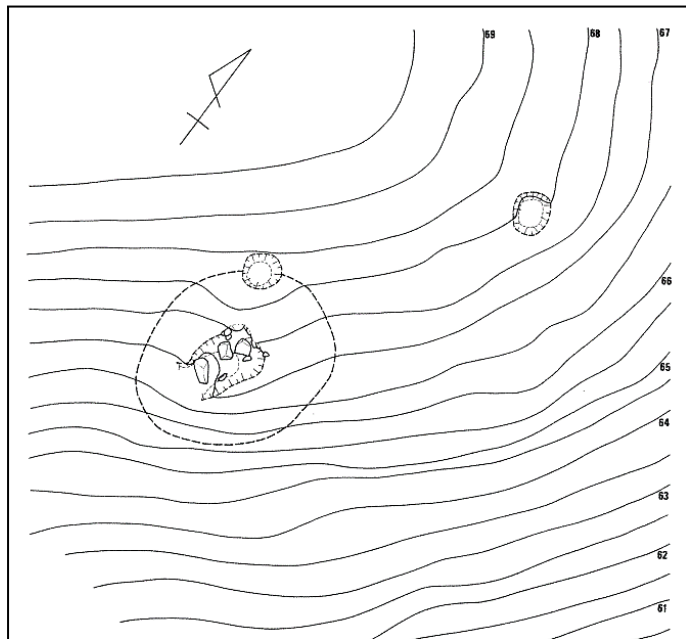
(早苗田古墳群D支群 10号墳)

本墳はすでに発掘調査を終え消滅している。1981年福岡市教育委員会発刊の「早苗田古墳群D群10号墳埋蔵文化財墳調査報告書」がこれに該当する。

（早苗田古墳群D支群11号墳）

本墳は油山から北東に派生する丘陵の南側斜面、標高約66.5～約68.5mに存在する。本墳の東側下方約40mのところに1号墳が位置している。本墳の南側斜面は非常に急なため墳丘盛土は流出が激しく、墳頂高は不明であるが、1号墳との比高は、現状で約9mを測る。

<墳丘>



本墳の墳丘盛土は、本墳が急斜面に存在しているため盛土の流出が著しく、ほとんど原形をとどめていないが、わずかに東側に高まりが確認でき、現状で墳丘規模は南北10.0m

、東西径約8.0mを測り、墳丘平面形は不正な円形を呈している。

<石室>

本墳の埋葬施設は、南西に開口する横穴式石室である。石室内には多量の土砂が流入し、また、約70×70cmの石が落ち込んでい

るため内部の詳細は不明である。現状で奥壁幅1.6m、左右側壁長約2.5mを測る。現在露出している周壁の石材は30×30cm程度の自然石を使用している。石室下部の状態は土砂

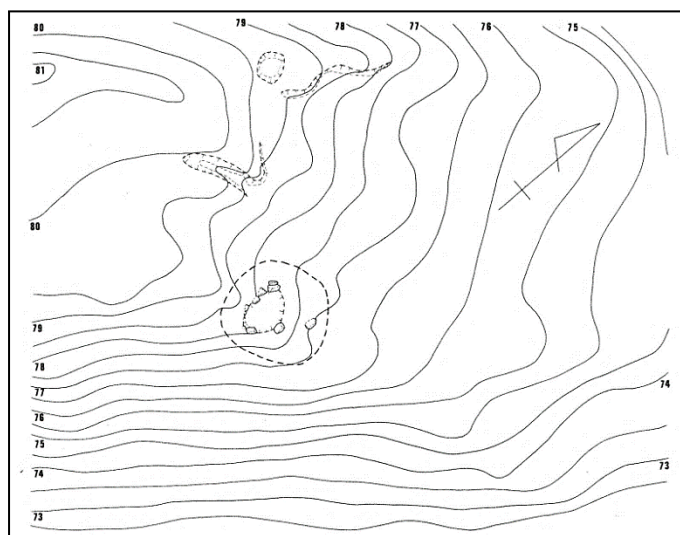
—早苗田古墳群D支群11号墳地形図—

で埋まっているため不明である。羨道部は埋没しており、現状では確認できない。本墳に使用されている石材はすべて花崗岩である。

（早苗田古墳群D支群12号墳）

本墳は北東に延びる丘陵の尾根稜線に近い南東斜面に立地している。標高は77～79mを測り、同一丘陵上に存在する13号墳より約40mを測る距離にある。本墳が存在する丘陵は尾根稜線の付近がやや平坦になっており、本墳はその平坦部分と比較的急な南東側斜面との変換点に位置している。

<墳丘>



墳丘盛土は流出が著しく、墳丘はその原形をとどめておらず、石室構築石材の周囲に若干の高まりが認められる程度である。したがって、一見して古墳と判断することは難しい。墳丘径は現状において、東西径6m、南北径6mを測り、やや不整な円形を呈している。

<石室>

埋葬施設は石抜きや自然崩壊のために、天井石をはじめその他の石材が大部分失なわれており、周壁は南西側と北西側の石を1段残すのみである。石室の崩壊と土砂の流入により、玄室の規模および平面プランは判然とせず、一見し

—早苗田古墳群D支群12号墳地形図—

て石室と判断することは難しいが、残存している石材の配列状態より推して横穴式石室と思われる。開口方向については、羨道部の石材が全く認められないため不明である。周壁は南東側に

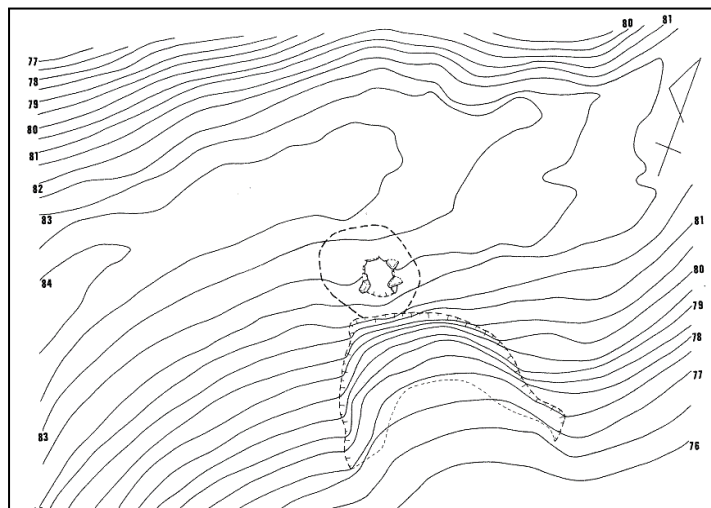
60×50cm程の石が1個あり、これに対して北東1mの所にわずかに上部を表出する石がある。また、南西から北西にかけて大きいもので60×50cm、小さいもので50×30cm程度の数個の石が円弧状に1段1列に並んでいる。石室構築状態の詳細については、石材が1段しか残っていないため不明である。なお、石材は花崗岩である。

(早苗田古墳群D支群13号墳)

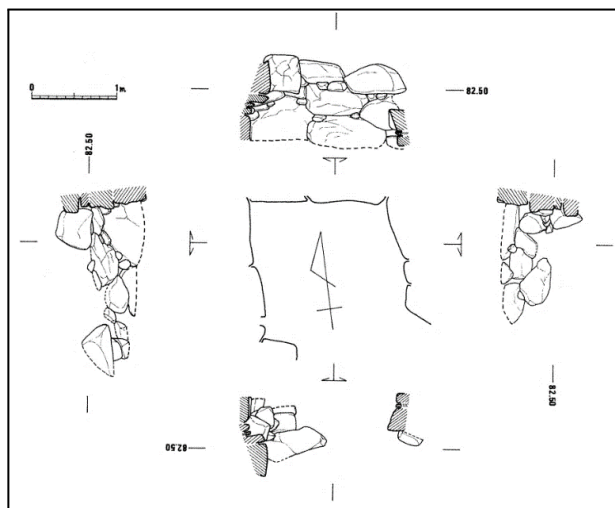
本墳は油山から北東に延びる丘陵の尾根稜線に近いやや南東よりの斜面、標高81.5～84.0mの間に存在する。本群の最高部、最西端に在り、12号墳の南西約40mに位置する。

<墳丘>

本墳の墳丘盛土は、天井石及び周壁の石抜きや自然崩壊のために現存する周壁の高さまで流れ出している。また、谷側は激しい土砂の流出により崩壊しており、旧状をとどめていないが、西側には墳丘と思われる盛り上がり若干見られる。墳丘規模は現状において、主体部主軸方向で4.7m、主軸直交方向で5.2mを測り、不整な円形を呈する。



—早苗田古墳群D支群13号墳地形図—



—早苗田古墳群D支群13号墳石室実測図—

<石室>

本墳の埋葬施設は、谷に向ってほぼ南西方向に開口する両袖単室の横穴式石室と思われる。玄室は石抜きや自然崩壊のために多量の土砂が流入しており、床面や腰石は判然としない。現状では奥壁幅約1.5m、左側壁約1.5mを測り、正方形プランを呈している。

奥壁は現床面より3段残っており、壁高は90cmである。各段とも70×40cm前後の石材を使用しており、すべて横位に積み上げている。左右側壁と比較すると石積みは丁寧であり、せり出しもそれほど激しくないが、栗石が多く使用されている。

左側壁は現床面より3段、右側壁は2段残っており、それぞれ壁高は90cm、40cmである。左側壁の奥壁側の1段目の50×80cmの石材を除いては、両側壁とも奥壁よりやや小さめの30×40cm程度の石材を使用している。しかし、両側壁とも残存状態は悪く、せり出しも激しい。左側壁は栗石が多く使用されており、右側壁は袖石が埋没あるいは流出しており、確認することができない。奥壁と左側壁との隅角には2段目に、右側壁との隅角には2段目、3段目に力石の使用が見られる。

羨道部は左側壁の袖石の部分を除いてすべて埋没あるいは崩壊しており、表出する石もない。なお、本墳使用の石材はすべて花崗岩である。

本墳東側の墳丘上よりスラッグ1個を表採した。本群においては、1980年に発掘調査を受けた10号墳からも21個出土している。

<スラッグ肉眼観察>

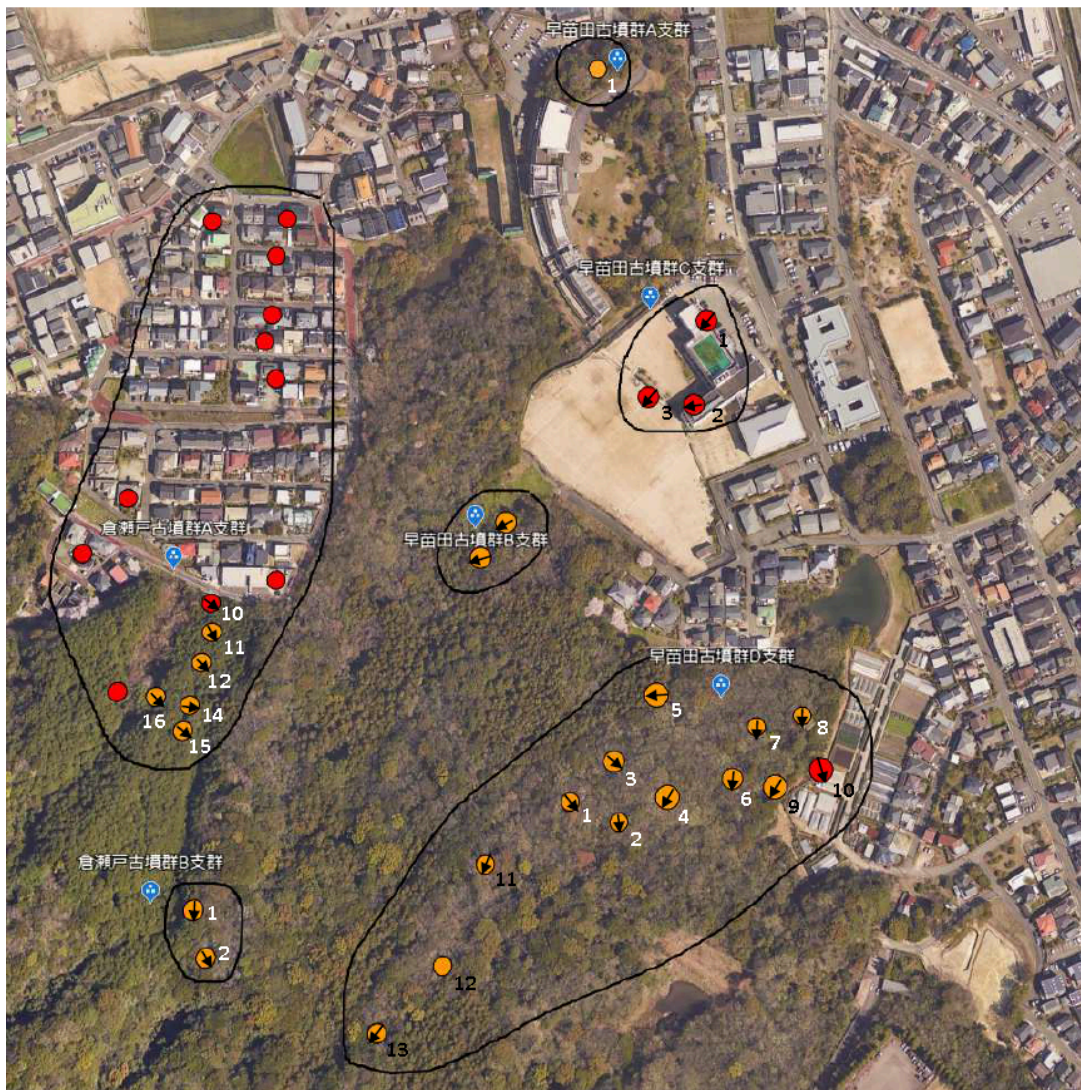
表面は全体的に赤褐色を呈しているが、やや赤味の強い個所と色の淡い個所とに二分される。また、表面には微小な気孔と大きな巣とが認められ、あまり砂を含んでいない。

* 早苗田古墳群D群1、2、3、4、5、6、7、8、9、11、12、13号墳の文面および作図は1985年福岡大学歴史研究部考古学班発行「早苗田・鳥越古墳群現状調査報告書」より転用した。従って、古墳の分布状況、保存状況、図面は当時のものである。

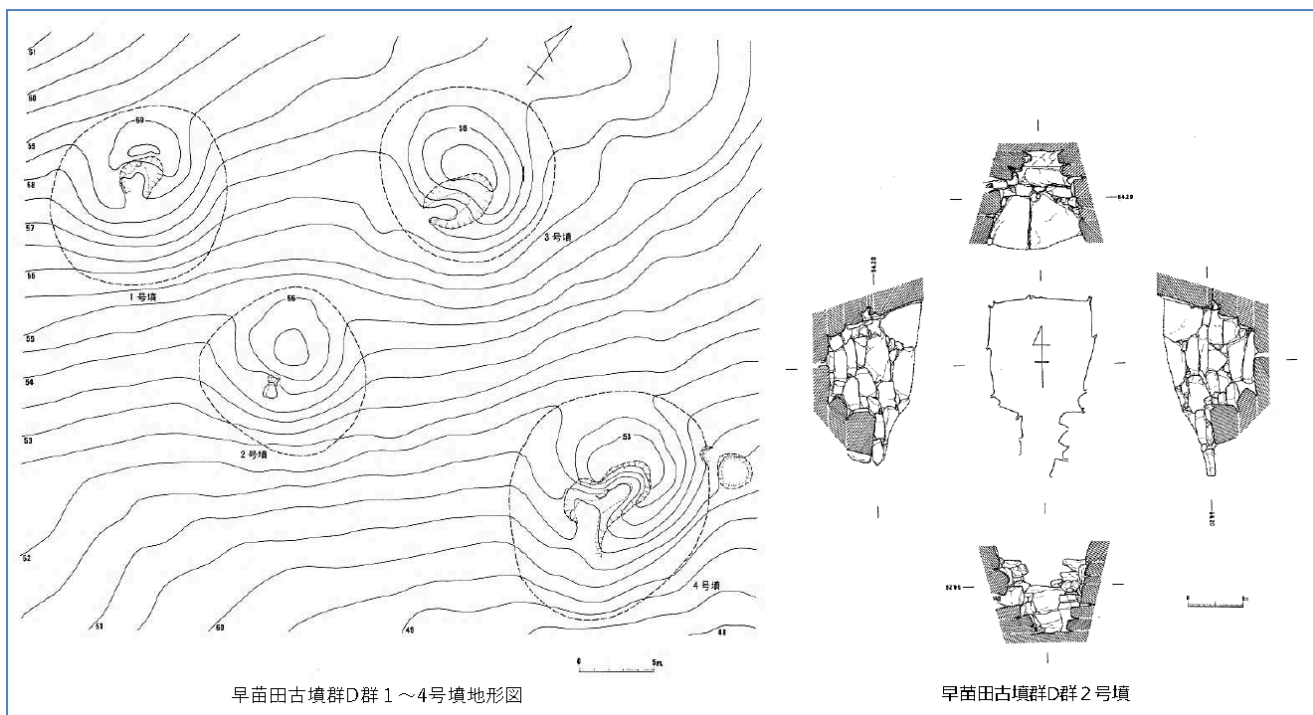
■早苗田古墳群古墳データ

					墳丘(m)		墳丘長(m)				石室(m)																
早稲田古墳群											玄室				前室				羨道								
古墳群名	支群名	号数	残存	発掘済	墳形	標高	墳頂高	主軸方向	主軸交差方向	形式	石室開口方向	主軸系	奥壁幅	左側壁長	右側壁長	前壁幅	玄室高	玄室面積	幅（玄室側）	幅（羨道側）	左側壁長	右側壁長	前室高	羨道幅奥門側	羨道幅玄門側	羨道左壁長	羨道右壁長
早稲田古墳群	A	1	○		-	35.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	B	1	○		円墳	39.5	41.0	10.0	12.0	-	S 80° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		2	○		円墳	41.0	42.5	13.5	13.0	-	S 55° W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	C	1	×	○	円墳	42.0	-	13.0	13.0	単室横穴式石室	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		2	×	○	円墳	46.0	47.9	-	-	単室横穴式石室	S 81° W	-	2.15	3.08	3.03	2.10	-	6.49	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		3	×	○	円墳	46.0	48.4	12.5	-	単室横穴式石室	S 43° W	-	2.31	2.80	2.85	2.17	-	6.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	D	1	○		円墳	56.0	56.8	11.5	11.5	-	-	南東	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		2	○		円墳	54.0	-	10.0	11.0	単室横穴式石室	S 4° E	2.10	1.80	1.86	2.00	1.50	1.50	3.18	-	-	-	-	-	0.75	0.70	0.70	0.70
		3	○		円墳	56.0	-	-	-	-	-	南東	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		4	○		円墳	49.0	53.4	-	-	-	-	南西	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		5	○		円墳	43.5	-	-	-	-	-	西	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		6	○		円墳	41.3	45.3	12.8	13.5	単室横穴式石室	S 4° W	-	2.10	-	-	-	2.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		7	○		円墳	39.5	-	11.0	10.0	-	-	南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		8	○		円墳	38.0	41.0	10.0	11.0	-	-	南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		9	○		円墳	36.0	-	15.0	13.0	単室横穴式石室	S 40° W	1.60	1.65	1.55	1.52	1.77	2.00	2.62	-	-	-	-	-	1.00	0.90	1.80	2.00
		10	×	○	円墳	35.0	-	16.0	16.8	単室横穴式石室	S 10° E	2.30	2.38	2.52	2.50	2.26	2.70	5.82	-	-	-	-	-	1.70	1.10	4.78	5.52
		11	○		円墳	66.5	-	10.0	8.0	単室横穴式石室	-	南西	-	-	1.60	2.50	2.50	-	4.00	-	-	-	-	-	-	-	-
		12	○		円墳	77.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	13	○		円墳	81.5	-	4.7	5.2	単室横穴式石室	-	南西	-	-	1.50	1.50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

■早苗田古墳群石室開口方向



■早苗田古墳群D支群地形図と石室
(1～4号墳)



(6～10号墳)

